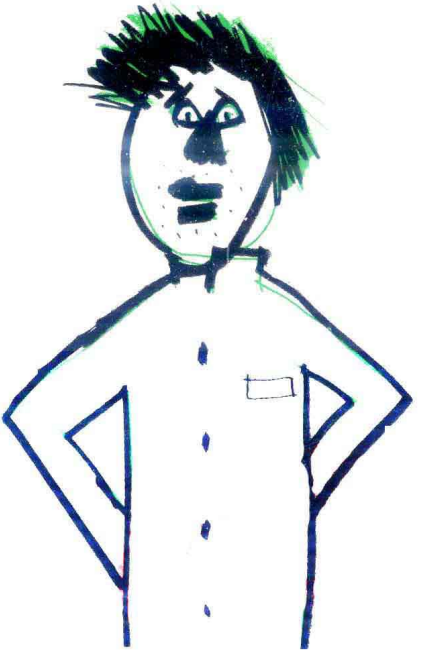
おへそに太陽を

読売新聞社

山中恒児童よみもの選集⑬

おへそに太陽を



著者紹介

山中　恒（やまなか　ひさし）

一九三一年、北海道小樽市に生まれる。一九五五年、早稲田大学演劇科卒業、百貨店宣伝部に籍をおく。大学在学中に童話会に入会し、のちに「小さい仲間」を結成。

一九五六年、「赤毛のポチ」で児童文学者協会新人賞を受賞。「ぼくは子どもたちに魂の自由であることのすばらしさを語りつづけたい」（「御民ワレ」あとがき）を信条に、自ら〝児童読み物作家〟と名のり、以後、今日性に富んだ作品をつぎつぎに発表。リアリズムから幼年童話・ファンタジー・ユーモア物と多才な活躍をつづける。

一九六〇年、著述に専念。放送台本、映画シナリオを執筆。一九六九年、「ぼくがぼくであること」で大学生のファンがふえる。一九七〇年、佐野美津男らと「六月社」（現六月新社）を結成。一九七三年、「三人泣きばやし」でサンケイ児童出版文化賞受賞。

一九七四年、「ボクら少国民」で戦時下教育の告発を始める。以後このシリーズは「御民ワレ」「撃チテシ止マム」「欲シガリマセン勝ツマデハ」「勝利ノ日マデ」「少国民体験をさぐる」とつづいて全六部で一九八一年に完結。

一九七八年、読売新聞社刊「山中恒児童よみもの選集」十巻にたいし、第一回巌谷小波文芸賞を贈られる。

一九七九年、「あばれはっちゃく」がテレビ朝日により連続テレビドラマ化され、圧倒的な視聴率を得ている。

山中恒児童よみもの選集⑬
おへそに太陽を

昭和五十九年　五　月　十五　日　初　版
昭和六十一年　五　月二十六日　第二刷

ISBN 4-643-26730-5　C8393
定価　七五〇円

著者／山中恒　© *Hisashi YAMANAKA 1984*　**装丁**／長友啓典　**イラスト**／坂井晴近
編集人／谷亀利一　**発行人**／堀内　稔
発行所／読売新聞社　〒100 東京都千代田区大手町一―七―一　〒530 大阪市北区野崎町八―一〇　〒802 北九州市小倉北区明和町一―一一
印刷所／凸版印刷株式会社　**製本所**／堅省堂　〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉

おへそに太陽(たいよう)を／もくじ

1 里美が怪しい予言をきいてビビること 6
2 里美が予言通りに殺人したらしいこと 26
3 里美の前に怪しい若者が登場すること 44
4 里美のタヌキ寝入りに父がいかること 63
5 里美の知らない所でヘソのやったこと 82
6 里美の助言で信乃がヘソにやったこと 101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7 里美と信乃が公園で見てしまったこと 120
8 里美と関係なく怪しい噂が流れること 139
9 里美が校長先生に登校停止をくうこと 157
10 里美と信乃と校長先生が彼を追うこと 175
あとがき 194

おへそに太陽(たいよう)を

1　里美が怪しい予言をきいてビビること

鈴木里美は南摩市立第三小学校の六年生である。

正月、里美は母の妹である澄代叔母さんの家にとまっていた。叔父さんが急に海外出張にでかけてしまったのと、息子の弘さんも外国へ留学しているので、広い家が叔母さんとお姑さんの百恵おばあさんのふたりきりになってしまったので、頼まれて、暮れから用心棒に来たのである。

用心棒といったって里美にできることといえば、せいぜい大声でわめき散らすくらいのものであったが、ひとりでふたり分たっぷりにぎやかなのと、声がめっぽう大きいので、ちょっと耳の遠くなってきた百恵おばあさんからの希望もあって、泊まりに来たのであった。

それに里美は家にいれば、四人姉妹の末っ子なので、姉たちにいいようにこき使われた。それと、中学の校長をしている気むずかしい父とは、どうもウマが合わぬというか、ソリが合わぬというか、とにかくしっくり行かなかった。父は里美と顔を合わせると、きまってぶつぶつ文句をいった。そん

な父と朝から晩まで鼻をつき合わせているよりは、叔母さんの家にいたほうが気が楽だった。

なにしろ、百恵おばあさんからも、叔母さんからもお年玉をもらえて、その上に用心棒代として、一日五百円の日当がついたのである。

里美は小さいときから、よくこの家へ遊びに来ていたし、百恵おばあさんも、里美のことを気に入って、自分の本当の孫のようにかわいがってくれたし、里美もこのおばあさんに甘えていた。

ところで、この百恵おばあさんという人は、若い頃、ヨーロッパへ音楽の勉強に行き、戦争にまきこまれ、戦争が終わってから、息子の正友叔父さんを連れて日本へもどってきた。戦争中に、向こうで知り合った日本人と結婚したのだが、その旦那さんは空襲でなくなったということだった。正直、それ以上にくわしいことは誰も知らなかった。

その百恵おばあさんと里美は、こたつで向かいあって、テレビを見ながら、ミカンをぱくついていた。叔母さんは正月早々、知人のところに不幸があって、でかけてしまったのである。

里美と競争でもするみたいに、ミカンをぱくついていた百恵おばあさんは、なにを思ったのか、口を動かすのをやめて、ミカンをつみあげてあるガラスの果物鉢をじっと見つめた。

〈なにやってんだろ、おばあちゃんは〉

そう思ったが、里美はそんな百恵おばあさんを無視して、ミカンをぱくつきながら、テレビを見ていた。テレビは〈世界の不思議〉というドキュメンタリーをやっていた。それから五個めのミカンに

手を出そうとした里美は、百恵おばあさんが、まだ気むずかしい顔でガラスの果物鉢をにらんでいるので、ちょっと気になった。

「どうしたの、おばあちゃん」

「しっ！」

百恵おばあさんはくちびるに指をあてて見せた。〈関係ないな〉と思った里美がかまわず五個めのミカンの皮をむきだすと、百恵おばあさんは、いつになく厳しい声でいった。

「じっとして！」

おどろいた里美が、百恵おばあさんを見ると、百恵おばあさんはくいいるように果物鉢の外側をのぞきこんでいたが、おどろいたように目を丸くして、その目を里美にうつした。

「どうかしちゃったの？」

百恵おばあさんは返事もせずに、じいっと里美を見た。

「ねえ、どうしちゃったのよ！」

百恵おばあさんは返事をするかわりに、あたりをうかがった。

「変ねえ、誰もいないわよ」

「そうだね」

「ねえ、どうしちゃったのよ！　なにか気になることでもあったの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「まあね」
里美は五個めのミカンの皮をむき始めた。気がつくと、百恵おばあさんはじいっと里美を見ていた。
「あ、わかった！　おばあちゃんがミカンをふたつしかたべないうちに、里美が八個もたべちゃったんで気を悪くしたんだ」
「なに言ってるの、八個だなんて。あんたはもう十個もたべてるよ。でも、そんなことは気にしていないよ」
「じゃ、なにを気にしているの」
百恵おばあさんは窓の外の遠い空を眺めた。それから気をとりなおしたように、里美の目を見た。
「里美ちゃん、あんた、この話は誰にもしないね」
「この話って、どの話？」
「せっかちだねえ。これから私がする話だよ。澄代さんや、お父さん、お母さん、お姉さんたち、誰にも話しちゃいけないよ」
「うん」
里美はたべかけのミカンを一ぺんに口のなかへほうりこんで、大きくうなずいた。
「誓う？」

「うん、誓う誓う、ぱっちり誓っちゃう！」
「なんだか、調子が良すぎて怪しいね」
そういうと百恵おばあさんは初めて、声を出して笑った。
「そんなこと絶対にナイナイ！」
「そうかい？」
「だけど、その話、ほかの人にしたら、どうなっちゃうの？」
「さあ、どうなるか、私にもわからないね。だけど、あんまりいいことが起きるとは思えないね」
「不幸なこと？　死んじゃうってこと？」
「さあ、死ぬこと以外にも、不幸なことがあるからね。それと、こういう話は、人はあんまり信じたがらないからね」
「ふうーん、それで、どういう話なの」
そういいながら里美がミカンの皮をむき始めたので、百恵おばあさんは、里美の手からむきかけのミカンをとりあげた。
「里美ちゃん、あんた、まじめに聞かないなら話さないよ。これはあんたの運命に関することなんだからね」
〈運命〉と聞いて、里美は目を光らせた。里美は、そういう種類の話が大好きなのだ。

「あのね、里美ちゃん」
「はい」
「あんた自身は信じないかも知れないけど、あんたは、どこやらの由緒ある家のお姫さまの生まれかわりだよ」
「え？　こ、この里美が？」
「そう。詳しいことはよくわからないけど、武田一族に滅ぼされた殿さまの娘だね。そのお姫さまがあまり自分が不幸だったので、もう一度やりなおしたいと願って、あんたに生まれかわったんだと思うね」
「ひゃあ！　それで里美はどういうことになるの」
「お金以外のことなら、あんたの思うままになる。たいがいの望みはかなえられる。つまり、あんたの年齢にかなった望みで、あんたが努力して、ひとりでやれることなら、たいがいのことはかなえられるということだね」
「それ、どういうことなの？」
「だから、あんたがマラソンとか、勉強とかで一番になりたいと思って練習したり、勉強したりすれば、望みがかなうということ」
「なあーんだ。そんなことなら、当たり前じゃないの。うちのママだって、そういうもの」

「そりゃ、里美ちゃんが勉強しないからでしょう」
「へへへー」
「でも、もうひとつ、里美ちゃんを〈お姫さま〉と知って、力になってくれる若者が現れる。これはなかなかの実力者だよ」
「ふわー！　ロマンチック。外国のおとぎ話みたい。里美がお姫さまで、里美が危機一髪のときは、白い馬にのった王子さまが助けに来てくれるっていうわけね」
「そうだよ。でもね、あんまり嬉しがってはいられないよ。いまの話がほんとうにあんたの運命なら、里美ちゃんは私を殺すよ」
「ええっ！」
　ロマンチックな話が一転して、恐ろしいことになったので、里美は思わずとびあがって、百恵おばあさんを見た。百恵おばあさんはまた窓の外の遠い空を見るような目つきをしていた。
「でも、これは避けられないみたいだね。ただし、私はそのことで里美ちゃんをうらむようなことはないね」
「いやよ、そんなことって！　里美がどうして、大好きなおばあちゃんを殺さなければならないのよ！」
「私にもわからないよ。でも、そうなってるよ」

「そんなのいやよ。里美、殺人犯人になって、鑑別所なんかへ行きたくないもん！　それに、里美には、おばあちゃんを殺さなければならない理由なんて、ひとつもないわ」
「そうだよ。いまのところ、私にも里美ちゃんに殺されなければならない理由なんて見つからないから、おかしいなと思ってるんだよ。だけど、それが運命というものらしいね」
「やだ、やだ、やだ！　そんなのむちゃくちゃよ！　それじゃ、里美、もうおばあちゃんのそばへ寄りつかないから。すぐうちへ帰るわよ」
　そういうと、里美はこたつからとびだしてしまった。
「そんな！　待ちなさいよ。いまのみんなじょう談。私が、ぼうっとして夢かまぼろしを見ただけ。でも、これで、里美ちゃんが帰ってしまって、だれもいないこの家で、私がなにかにつまずいて転んで、打ち所が悪くて死んだということになれば、これは里美ちゃんのせいになるかも知れないよ」
「もう、いやあ！」
「わかった、わかった。ごめんよ、おどかして悪かったね。いまのみんな、じょう談だよ。里美ちゃんがあんまり、苦労なしな顔をして、おミカンをもしゃもしゃたべているので、つい、昔のジプシー占いを思い出して、からかってみたくなったの。さ、おこたへおはいり」
「うん、もう、おどかしちゃいやよ」
　そういうと里美は、こたつへもどった。

「でも、里美ちゃん、あんたは自分がお姫さまだと思うことは、悪いことじゃないよ。おミカンをたべるにしても、アフリカヒヒみたいに、もしゃもしゃ口へ押しこんだら、折角の品のいいあんたの顔ににつかわしくないからね」

「あ、わかった。それがオシュウトさんのいい方なんでしょう。もうちょっと、ゆっくりミカンを食べろっていえばいいのに、遠まわしにごちゃごちゃいうんだから」

「ふふふ、ま、そういうことだね。ただ、こだわるようだけど、里美ちゃんがもし、剣と皮と土とダイヤをもらったら、気をつけることだね。もっとも、いまどき、そんなものを里美ちゃんにプレゼントするような人はいないと思うけど」

「うん。だれかが、そんなものをプレゼントするといったら、断っちゃうから平気よ」

そんなことをしゃべっていると、玄関で、「ただいま」という声がして澄代叔母さんが帰ってきた。

「うー、さむ、さむ、さむ！　外は結構、ひえますよ」

そういいながら、叔母さんはこたつへとびこんだ。

「ごくろうさんでしたね。お正月早々」

「いいんです。どうせ買い物もありましたし、今日あたり、あちこちお店もあいてますから。それよりお母さん、岡田さんの御不幸っていうの、あれはひどい話でしたわ」

そういうと叔母さんは、ちょっとうらめしそうに百恵おばあさんを見た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com